

神達に拾われた男の少しIFな小話

モンターク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

試験的に投稿です。

恋愛を書こうとするけど、多分日常のほうが近い気がする。

連載は不定期です。

簡単なメイン二人の紹介

リヨウマ・タケバヤシ

11歳

元は39歳のシステムエンジニアであり、寝てるときに3発ほどくしゃみをした際に頭の血管がきれご臨終となったというカズマさん以上にアレな死因。

転生後は8歳の男の子として3年ほど森で過ごした後、ひよんなことから侯爵家の方々と知り合い旅に出ることとなった。

なお前世はおっさんと言っても差し控えないものだったが、転生により記憶自体は39歳を持つが精神などすべて11歳の子供となり、精神的にも退行していたりする。

エリアリア・ジャミール

11歳

侯爵家の一人娘。

なろう界隈としては珍しく主人公のを凌駕するほどの魔力量を持っている。

リヨウマのことを慕っており、度々駆け寄りたりする。

なおその本当の感情は不明。

原作改訂版も見つつ、基本はコミカライズとアニメ版準拠でいきます。

そのためリョウマのモノローグなども「僕」の口調です。

誰得？と思いますが、お付き合いしてくだされば幸いです。

鼓動

目次

1

鼓動

「そうです。お嬢様、そんな感じで魔法を…」

「そうですか？なるほど…」

彼、リヨウマ・タケバヤシはエリアリア・ジャミールに魔法で遊ぶことを教えていた。

「リヨウマさんの教え方はわかりやすいですわ！まるで先生みたいです」

「そ、そうですか？」

（まあ後輩に教えることは慣れてるからなあ…：田淵君に色々教えてたし）

彼はいわゆる転生者であり、前世で就寝中の際で出たくしやみが原因で死去というあんまりなものであるほどのとても運が悪い人であった。

だが三柱の神の加護を得て、子供の状態になった上で転生を果たし、そこから色々とあり、現在はジャミール公爵家のお世話になっているのだ。

なお前世では武術の鍛錬などを重ねてきたこともあってか筋肉モリモリな大男であったが、転生後はまったくもってそんなことを感じさせないかわいい男の子になっている。

年齢は11歳だが、精神的には前世での39とこの世界での3年をあわせて約42歳という計算である。

そんな彼であるが…

「リヨウマさん、次はどこを教えてくださいますか？」

「…あ、うん。次は…」

（くっ…：またこれだ…！）

ここ最近、彼女にドキドキしていたのだ。

前世では彼は父からの厳しい躰や母との生活そして死別、ブラック企業務めなど様々な苦勞をしており、恋愛沙汰とは程遠かった。

それらから解放された上でこんな感じで触れ合う機会が増えた。

耐性がない彼では当然のことであろう。

(いやいや……気のせいだよ気のせい……うん)

もちろん彼は心のなかでそれを否定している。

きつとおつさんがよく感じる父性の亜種であると。自身はロリコンではないと。

実際本来の年齢では十分おつさんなのであるが、体自身は正真正銘の男の子である。

人間というものは体の成長とともに精神も成長するものであり、竹林竜馬という精神は言うまでもなく大人である。

だが今の体は子供であり、なおかつ3年という長い期間を子供の体で一人過ごしていたことにより精神が子供の体に引っ張られ、このように「ドキドキ」もしてしまうようになったのだ。

おつさんと少女なら問題もあろうが、同年代ならばそれは無問題である。

「どうかなされましたか？リヨウマさん」

「あ、いえ、な、なんでも……」

(とにかく落ち着こう……変な様子を見せると逆に心配されそうだし。教える立場が変な風になっちゃいけない……)

とりあえずリヨウマは冷静を装いつつ、引き続きエリアリアに教えていたのであった。

「はあ……」

そしてリヨウマが使う宿屋の一室。

彼はどうにも気分が一言で言えば「変」なものになっていた。

(なんか気分が……いや、前まで女の子に教えたことなんてなかったからなあ……当然だよね)

リヨウマはため息をつく。

やはりその原因には気づいていないようであった。

「あ、そうだ。今日のこととまとめておかないと……」

ふと日記をつけ忘れていたことに気づいたリヨウマは机に向かおうとするが――

「ん?」

コンコンとドアを叩く音がする。

軽い音や低いところから聞こえるに察するにエリアリアお嬢様の
ものであろう。

(どうしたんだろう?)

「はい」

リヨウマがドアを開けると、目の前には案の定エリアリアがいた。

「ど、どうしたんですか?」

「いえ、リヨウマさんにお礼をしたいと思って」

「お礼?別に僕は……」

なんてことはない反応をする。

まあリヨウマにとってはそこまで大きなことではないと思ってい
るからだ。

(お礼ってなんだろう?子供だし、手作りのなんかとかかな…?)

そう思っていると――

チュツ

「?……!?!」

リヨウマの頬に何か柔らかい感触。

エリアリアはまさかの頬にキスをしてきたのである。

「では、また明日もお願ひしますわ」

「あ、ああ…そうだね……」

そうしてエリアリアはリヨウマの部屋を後にした。

なおリヨウマは脳内が混乱し、すぐにベッドに埋もれた。

(えつと…あつと…あつと…あつ、そうだよ。海外とかってキスとかハグと
か普通だから…あれ?でもこっつて海外って言うんだっけ?異世界
だから日本じゃないのはわかるけど…でも…あれ?)

自分を納得させる答えが全く出ず、暫くの間悩み続けるリヨウマで
あった。